

幼児・児童におけるパーソナリティ特性の推論の発達 —心の理論との関連—

清水 由紀

(お茶の水女子大学 人間文化研究科)

問題

筆者は、パーソナリティ特性(以下「特性」、e.g., 親切的な)の理解がどのように発達するのかについて、特性と心的状態(特に動機)との関連性の理解という観点から検討している。清水(2000)では、就学前児(3~6歳児)を対象に、1場面における特性→動機→行動の因果関係の推論ができるかを調べ、6歳は記憶の補助があれば可能であることを示した。清水(2002)では、さらに年中~3年生を対象に、場面を超えた特性→動機→行動の因果関係の推論ができるかを調べ、2年生から可能であることを示した。それでは、なぜこの年齢まで、特性を場面を超えて一貫した心的状態を生み出すものとして理解しないのだろうか?筆者は、どのような能力が特性の理解に必要なのかについて、心の理論、特に信念と欲求の理解の発達との関連性から調べた。今回は、特性の理解と欲求の理解との関連性について報告する。

方法

【被験者】年中29名、年長28名、1年生20名、2年生26名。

【手続き】個別面接。＜特性理解課題＞ポジティブ特性・ネガティブ特性各1題。下線つきが従属変数。

①行動呈示：ある人物の特性を示す行動を3つ呈示する。(e.g.,みきちゃんが友達に黒板を消すのを手伝う、など)②特性推論1(確認課題)：行動から人物の特性を推論してもらう(いい子 vs.悪い子)③他場面における行動・結果呈示：他の場面におけるその人物の行動と結果(特性と不一致のもの)を呈示する(e.g.,小学校に遊びに来た幼稚園の子を幼稚園の運動場へ連れて行く。するとその子は怖いと悲しむ)④動機推論：その人物の行動の動機を推論してもらう(e.g.,喜ばせるため vs.悲しませるため)⑤特性推論2：特性推論1と同じ⑥行動予測：さらに他の場面におけるその人物の行動を予測してもらう(e.g.,ブランコが一つしかないとき、自分が先に乗る vs.友達にゆずる)＜欲求理解課題＞(1)欲求とその行動の結果は、独立である(e.g.,悲しませたいと思っても、喜ばせることがあるということがありうる)ということの理解(2)結果に対して行為者がどのような情動を生起させるかは、行為者の欲求次第である(e.g.,悲しませたいと思つた行

為者は、喜ばせたという結果に対してネガティブな情動を生起させる)ということの理解。(1)が1題、(2)が2題の計3題。

結果

*動機の理解レベルによる分類 欲求理解課題のうち、全問正解だった場合はレベル3、(1)が正解で(2)が不正解だった場合はレベル2、(3)全問不正解だった場合はレベル1と分類した。

動機推論 ポジティブ特性(FIG.1)とネガティブ特性(FIG.2)のどちらも、特性と一致した推論をした割合は、レベル1<レベル2<レベル3。レベル3は、どちらの特性タイプも80%以上が特性と一致した動機を推論した。特性推論2 最初に呈示された特性と一致しているほど高くなるように得点化(範囲0~4)。ポジティブ特性はレベル1≒レベル2<レベル3、ネガティブ特性はレベル1<レベル2<レベル3。どちらの特性タイプも、レベル3のみ中央値より有意に高かった。行動予測課題 特性と一致した予測をした割合は、ポジティブ特性は欲求理解レベルによる差は有意ではなく、ネガティブ特性のみレベル1≒レベル2<レベル3。レベル3のみ70%以上が特性と一致した行動を予測した。

考察

特性を場面を超えて一貫した心的状態(動機)を生み出すものとして理解するためには、欲求が結果とは独立しているということの理解だけではなく、同じ状況でも欲求によって異なる情動を生み出し得るということの理解も必要であることが明らかになった。従って、特性理解は、心的概念同士の関連性を理解していく中で、獲得されていくことが示唆された。

